

Title	初代長岡市長・牧野忠篤と地域社会：政治・実業・教育
Sub Title	Makino, Tadaatsu, first mayor of Nagaoka City and local society : politics, business, and education
Author	小川原, 正道(Ogawara, Masamichi)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2025
Jtitle	近代日本研究 (Journal of modern Japanese studies). Vol.41, (2024.) ,p.47- 73
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 近代日本の地域社会・業界と慶應義塾：ローカル・リーダーの視点から
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20240000-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

初代長岡市長・牧野忠篤と地域社会

——政治・実業・教育——

小川原正道

一 はしがき

初代長岡市長を務めた政治家・実業家の牧野忠篤は、一八七〇年二月五日（明治三年一〇月二二日）、第一一代長岡藩主・牧野忠恭の五男として東京に生まれた。一八七八年に第一五代牧野家当主として家督を相続し、一八八一年に学習院に入学、一八八四年に子爵を受爵した上で、一八八九年に学習院を退学して一八九〇年に慶應義塾に入学し、一八九三年に義塾を卒業している。一八九七年に貴族院議員に当選して、一九三五年までその任にあり、この間の一九〇六年に長岡市長に就任して、一九〇八年まで在職した。一九一六年（大正

五年）には大日本蚕糸会理事・副会頭に就任し、一九一七年に長岡開府三百年記念祭に参列、以後も産業界の要職を歴任し、一九二一年に大日本蚕糸会の会頭に就き、一九二二年に蚕糸同業組合中央会会長、一九三一年（昭和六年）に帝国農会会長、一九三二年に日本中央蚕糸会会長となっている。一九三五年四月一日に死去した。⁽¹⁾

牧野家に伝わる資料群は現在、「牧野家資料」として長岡市と牧野忠昌氏が所蔵しており、いずれも長岡市立科学博物館において整理中のため、一般公開はされていない。筆者は同館および牧野氏のご厚意により、同資料所収の忠篤関係資料を閲覧することを得たため、本稿ではこれらを活用して、忠篤がいかなる教育を受けた上で、政治・実業関係の事業にどう取り組んだかについて検討し、近代日本における慶應義塾出身のローカル・リーダーの一事例を示すとともに、旧大名華族の政治・実業実践という明治国家および福沢諭吉の要請に応じた旧華族のケース・スタディーを試みるものである。

忠篤については、戦前に刊行された坂本辰之助『子爵牧野忠篤伝』（華堂子爵伝記刊行会、一九四〇年）があるものの、『長岡市史』など、長岡の歴史について記した書籍等で若干言及される程度で、まとまった学術的考察がなされたことはなく、その中央・地方の政界・実業界における地位に比して、研究が大きく立ち後れている現状にある。本稿で忠篤の生涯に沿って、その活動内容と意義について検討する所以である。なお、忠篤は『中央蚕糸報』『帝国農会報』『大日本農会報』『帝国農会時報』『農業世界』『石油時報』『工政』『華族青年会雑誌』『日本公論』といった雑誌に意欲的に祝辞や論考を寄せており、本稿では「牧野家資料」に加えて、これらの資料も積極的に活用していきたい。

二 慶應義塾での修学過程

忠篤の経歴の上で注目されるのは、華族の大半が学習院で学び、忠篤自身も当初は学習院に入りながら、これを退学して慶應義塾を卒業していることである。忠篤はなぜ、義塾に入ったのか。

長岡藩はもともと、藤野善蔵をはじめ、初期の慶應義塾に多くの塾生を輩出したことで知られている。⁽²⁾ 最後の長岡藩主で、忠篤の実兄である忠毅もその一人であった。忠毅の義塾入学を推進したのは三島億二郎（長岡藩大参事）で、その日記によると、一八六九年五月二日条には「午後、福沢之塾に遊ぶ新錢座塾生百二十余人と云藤野を訪ふ也」と、福沢の塾に赴いて藤野と会ったことが記されており、二月七日条に「福沢諭吉を訪て、御遊学之事を請願ス、即、被諾」として、福沢のもとを訪れて忠毅の入学が認められたことが記されている。⁽⁴⁾ 翌年に上京した三島は、五月一六日に藤野らを伴って福沢の塾を訪れ、一〇月二四日に福沢と面会して、改めて忠毅の入学を託した。⁽⁵⁾ 牧野家の日誌には同年閏一〇月六日条に、「従五位様今日……福沢諭吉方に御入塾御引移」とあり、いよいよ福沢の塾に入塾したことがわかる。⁽⁶⁾ 三日後の閏一〇月九日条の日記に三島は「前日来鋭橋様先十年御入塾之願済也、畢竟福沢之塾より好意ありて転スルハ格別、然らされハ御年迄ハ退塾なさるましく、偏二御大成を期し奉る旨御家令初榎其他関係之人々ニ約ス」と記し、塾側の意向がなければ退塾することなく、「大成」を目指すことが家令以下の関係者間で約束されたとしている。⁽⁷⁾ 「従五位様」は忠毅、「鋭橋」は忠毅の幼名である。

廃藩置県前後から一八七六年までの間、大名華族（約半数が藩主経験者）が慶應義塾に多数入学しており、

特に奥羽越列藩同盟に参加した旧藩の出身者が目立った。そこには、廃藩置県に際して発せられた華族に対する「留学の勅諭」の影響や、戊辰戦争で賊軍として受けた処分からの失地回復に対する期待があったことが指摘されている。事実、義塾での修学を経て、海外留学する例も目立った。⁽⁸⁾

忠篤は兄や周囲の先例を踏まえた上で慶應義塾に入学し、こうした大名華族の系譜に連なることとなったわけである。なお忠篤は「牧野家のことを始終心配してくれた」人物として、波多野伝三郎⁽⁹⁾や義塾に学んだ小林雄七郎⁽¹⁰⁾、三島をあげ、彼らが自由党・立憲改進黨といった党派を超えて相談し、牧野家のために尽力してくれたと回想している。⁽¹¹⁾

『子爵牧野忠篤伝』は、世相が次第に西洋化し、奢侈享楽に流れるなか、忠篤もその悪影響を受けつつあるため、「牧野家の旧臣等は、忠篤子の前途を憂慮し、元老格の加藤一作、榎眞一、小金井権三郎、柳野直等が協議し、旧臣の者には、在京青年にて忠篤子よりは年長者の榎哲、橋本圭三郎⁽¹²⁾両氏を指導者とするに決し、榎哲に忠篤子の身を預かるやうに交渉した。榎哲は、其の任でないと辞退したが、加藤一作、榎眞一の二老から強いて勧められるので、已むなく引き受けた」と忠篤上京の経緯を記している。⁽¹³⁾ 榎哲は慶應義塾出身で当時、義塾寄宿舎舎監を務めており、旧長岡藩の「元老格」が相談の上で、忠篤の監督係を引き受けることになったわけである。

榎が福沢諭吉に忠篤の教育方針について相談したところ、福沢は「士魂商才を獲せしむるの目的で指導し、大名華族であつても、一の商店員に使用し役に立つやう、人間を作り上げる事に努むべきである」と述べた。これを受けて榎は忠篤を慶應義塾に入学させ、寄宿舎で同居することになったという。忠篤は塾生時代、学業の傍ら弓道部に所属し、福沢からは元禄武士の心で「俗吏商人の才」を発揮するよう訓話を受け、掃除、洗濯

など、自立生活の習慣を身につけて、貧民街や商店、工場なども視察した⁽¹⁵⁾。

福沢は一八九一年七月の慶應義塾卒業式で、「今後実業社会に入るとして……老生が常に云ふ、今の後進生にして立身の意あらば、其心術を元禄武士にして、其働を小役人素町人にす可し」と演説しており⁽¹⁶⁾、大名華族が殖産興業に取り組むこともまた持論であったから、慥にこうした助言をしたとしても、何ら不思議はない。

かくして忠篤は一八九〇年七月、慶應義塾に入学した。保証人は牧野貞寧である⁽¹⁸⁾。貞寧は筈間藩主を務めた忠篤の義弟で、一八七二年に義塾に入学しており、義塾の先輩にあたる。「牧野家資料」には忠篤と茂子（妻）と貞寧と悦子（娘）が一緒に写った写真が残されており⁽²⁰⁾、両者が親密な関係にあったことをうかがわせている。

注目されるのは、忠篤の入学にあたって、長岡で学資金の献納運動が起きたことである。「牧野家資料」に含まれる「忠篤様御学資金献納人名表」によると、長岡を中心とする地域の八四七名から、各一銭から一〇〇円までの合計二一七〇円九六銭が学資金として献納されたことがわかる。献納者のうち士族は五四四名、平民は二一一名、身分不明者が九二名と、身分は広い範囲にわたっていた。人名表の裏表紙には、忠篤の次のような謝辞が記されている。

諸君ハ不祥忠篤ノ魯鈍ヲ棄ス他日為ス有ランコトヲ期シ今回二千余金ノ学資ヲ恵与セラル其ノ忠篤ヲ親愛スルノ深キ旧誼ヲ懷フノ厚キ真ニ感謝ニ堪ス忠篤不祥ト雖モ今ヨリ益志操ヲ確實ニシ刻苦勉勵諸君ノ深厚ノ芳志ニ背カラサランコトヲ誓フ謹テ謝詞ヲ呈ス 忠篤⁽²¹⁾拝

旧藩の「旧誼」を重んじる人々が忠篤の慶應義塾入学を後押しし、忠篤もこれに感謝して、「刻苦勉強」に励む決意が述べられている。おそらくは、牧野家を慕った旧藩有志が自発的に起こした運動だったのであろう。

慶應義塾在学中、忠篤は大同団結運動期に結成された自由党系政治結社「越佐同盟会」⁽²²⁾のメンバーとなっており、「牧野家資料」に収録されている義塾講堂前で撮影した集合写真（一八九三年七月一日撮影）の裏に「慶應義塾越佐同盟会々員」の名簿が記され、忠篤と横哲の名前を確認することができる。⁽²³⁾

こうした経緯を経て、一八九三年、忠篤は慶應義塾を卒業した。⁽²⁴⁾忠篤と「昵懇」の間柄にあったという長岡出身の画家・高村真夫は『子爵牧野忠篤伝』で、忠篤の学修成果について「子爵は慶應義塾学風の其頃の特長として、福沢先生の唱へられたところの自由思想、夫は主として英国の哲学者、スペンサーやミルの思想の影響」を受けたとする横の証言を引いた上で、「其時代の塾生が皆持つて居つた様に、子爵も又多分に受入れてお出になつたと想像されるのである。夫が子爵の終生を通じての平民的自由主義の人としての性格をつくつたのであろうと想はれるのである。併し半面には長岡藩の伝統的士風とも謂ふ可き、剛毅、廉潔、素朴の美風は充分持つて居られた」と証言している。⁽²⁵⁾

忠篤は「自由思想」やハーバート・スペンサー、ジョン・S・ミルの影響を受け、それが生涯を通しての「平民的自由主義」の基礎となつたが、旧長岡藩の「剛毅、廉潔、素朴の美風」の士風は崩さなかつたというわけである。忠篤が学んだのは別科と思われ、当時の別科では主に、ミル、スペンサーの自由論、代議政体論、教育論、経済論、社会学、および英語が講じられていた。⁽²⁶⁾

こうした武士的精神と商人の才知、社会の実態見聞を基礎に、自立生活を実践しながら「自由思想」の洗礼

を受けた忠篤は、「平民的自由主義」の人格を形成し、卒業後はまず、波多野伝三郎⁽²⁷⁾の推挙で長岡の宝田石油会社監査役に就任することとなった。長岡商業会議所会頭を務めた渡邊藤吉は、「子爵の慶應義塾御卒業の後、牧野家の事を非常に患へて居られた波多野伝三郎氏の推挙で、子爵は社会に立つ第一歩として、其頃、長岡にあつたが宝田石油会社に監査役として入社せられました」と述べている⁽²⁸⁾。

忠篤は、青年華族自身が「国民の標準」として国家に貢献していく責任感を強調しており、これはその実践の第一歩でもあつた。一八九六年五月に『華族青年会雑誌』の創刊号に記した「華族青年の親和競合ならんことを望む」で忠篤は、「今や高食安眠の時に非らず、特に我々同族は、社会の上流に立ち、身に荣誉を担ひ、重大の責任を有するものなれば、宜く嚴肅至誠の氣風を守り、上は 皇室に忠節を尽くし、下国民の標準となり、国家に勤勞すべきは論を待たず、斯く至大の義務を負担するものなれば、少く眼を前途の大勢に注ぎ、宜く奮起するの所あるべきなり」と述べている⁽²⁹⁾。この原点に福沢の教えや慶應義塾での学習があつたことは、言うまでもない。

三 長岡市長としての政治活動

一九〇六年三月、内務省は新潟県古志郡長岡町を市制施行地に指定し、翌月に長岡市が発足した⁽³⁰⁾。『長岡日報』（一九〇六年四月二日付）は「市長の資格」と題する記事で、長岡は「商工業の都会」であるため、「長岡商業家」を代表する「地位、名望、材能^{マツ}」がある人物が市長となるべきで、「官吏」や「政党」出身者では商工業が衰退すると論じている⁽³¹⁾。

市制施行自体、長岡商工会や長岡商工談話会などが後押ししてきたという経緯があったが、経済界の思惑が交錯して市長の選考は困難を極めて調整ができず、結局重石を据えるため忠篤に白羽の矢が立った。⁽³²⁾ 忠篤の招聘に動いた中心人物は、長岡市会議長で慶應義塾出身の渋谷善作である。⁽³³⁾ 『長岡市史』はその経緯について、次のように記している。

第一回の市会で、初代の議長に、長岡銀行の専務取締役の渋谷善作が選ばれた。市会の閉会后、常磐楼で開かれた秘密会で、牧野家（旧長岡藩主）当主の牧野忠篤、代議士の波多野伝三郎の二人を市長候補に選び、内田三省・渋谷善作・川上佐太郎の三名が交渉に当たることになった。七月五日、三名は上京し、波多野を伴って牧野家を訪問して、市長就任を懇請した。⁽³⁴⁾ 最初は躊躇した牧野も、再三の要請を断りきれず、一年間という条件で就任を承諾した。

忠篤は渋谷らの再三の要請を受けて、一年間限りの条件で市長職を引き受けたわけである。『新潟新聞』（一九〇六年七月九日付）も「三氏は波多野氏同行にて子爵邸を訪問し、親しく面謁し市長として適當の人なく其人選に困難なる事情を縷陳し、就任あらんことを懇請せしに、子爵は容易に承諾されざるを以て右三氏は一先づ引取り、更に翌日打揃ふて同邸に抵り前趣旨を繰返して懇請する所あり、茲に至り子爵の意も旧藩領土のこととて委員の懇請厭し難く、耄力年在職の条件付にて就任のことを承諾せられたりと云ふ」と、同様の経緯を伝えている。⁽³⁵⁾ 三氏とは、内田三省、渋谷善作、川上佐太郎のことである。忠篤としては人選がまとまらない以上、旧領地の市長職を固辞し続けることはできなかった。

忠篤は当初一年間とされた期限を超えて、一九〇六年八月二九日から一九〇八年五月二二日まで長岡市長を務めたが、その間の態度について『子爵牧野忠篤伝』は、「牧野子は、生れながら温和な性格の持主であり、而も困苦の境遇の中に成長し、且慶應義塾で平民的に薰陶されたので、人格が練れて居り、殿様であつて殿様ぶらず、各方面の人と事とに接して如才なく善処するゆへ、市長の椅子に在り極めて治まりが良好である。又実用の学問も修めて居るゆへ實際問題に対する理解力もあり、事を処理するに適正であり、自治体の首脳者として申分のない人」であつたと記している。⁽³⁶⁾ 忠篤を顕彰する意味合いの強い伝記であるため、割り引いて受けとる必要があるが、慶應義塾で学んだ「平民的態度」と実学への関心が基礎となつていたという指摘は、重要である。

事実、市長在任中、忠篤は「實際問題」に取り組み、生活環境整備のために、治水・下水路を調査し、蒸気ポンプを導入して消防設備充実に尽力した。⁽³⁷⁾ 長岡商工談話会は町名改正や屋上・雁木改良、公園設置、下水改良、商工学校設置、新設会社免税措置、独立選挙区獲得などを建議し、⁽³⁸⁾ 長岡商業会議所も工場試験場・高等工業学校設置意見書を提出、北越製紙会社が板紙製造を開始し、天然瓦斯会社や炭化石炭製造工場も創設され、油田産出量が増加するなど、「地方に於ける石油事業界の黄金時代」を迎え、忠篤自身、長岡市農会や在郷軍人会、実業補習学校、斎藤女学館の設置や、聾哑学校への補助金の給付、北越鉄道の国有化、長岡高等女学校の県立化などを推進した。『子爵牧野忠篤伝』は「牧野子は之がために斡旋尽力し、此の地方の進運に貢献する所があつた」と評している。⁽³⁹⁾ 郷土史も「石油事業の発展や工業高等学校の誘致などに尽くし、市政の基礎を確立した」と伝えている。⁽⁴⁰⁾

慶應義塾出身者のネットワークによって市長に就任した忠篤は、「殿様」への期待に「平民」的態度をもつ

て応答し、商工業に対する関心を政策として実践していったわけである。忠篤は市長退任後も長岡市政に関心を寄せ続けたようで、忠篤市長時代に助役を務めた河島良温が第二代長岡市長に就任すると、忠篤に市政の詳細を報告する書簡を送っている⁽⁴¹⁾。

四 中央・地方における実業活動

忠篤の実業活動についても見ておこう。まずは牧野家の家業のひとつとした酒造業だが、宝暦年間に酒造業を営みはじめた長岡藩の御用商人・山崎屋が一八八二年、牧野家の懇請により酒蔵「柏屋」を経営して製造石数を向上させ、その家紋である「三つ葉柏」を意匠として販売促進のために利用し、酒名も「柏露」と改めた。一八九八年の大火事や一九四五年の空襲による被害を経て、現在も柏露酒造が製造を続けている⁽⁴²⁾。

忠篤が特に関心を寄せた事業は、養蚕と農業であった。『子爵牧野忠篤伝』は「各団体の会務に対する子爵の態度を見るに、最も熱愛されたのは大日本蚕糸会で、他の団体に対しては比較的冷静であつた」と、特に大日本蚕糸会を重視したとしているが、同会は一八九二年に蚕糸業に関する調査研究、政府への建議、官庁の諮問、海外の蚕糸絹業団体との連携、広報活動などを展開するために蚕糸業者が設立したもので、皇族が総裁を務めた。忠篤は会頭の清浦奎吾との知遇によって理事、副会頭、会頭に就任し、第一次世界大戦後の糸価の暴落を受けて、一九二九年には糸値安定融資補償法の制定に関わり、同法審議のための農林大臣諮問機関・蚕糸委員会に委員として参加している。糸価が暴落したため、忠篤は大蔵省、農林省、日銀、横浜正金銀行、立憲政友会、立憲民政党などと交渉し、各地方にも多数出張して事情調査に取り組んだ。この間、一九一八年

には長岡中学校で北陸四県生糸共進会が開催されると、総裁の閑院宮載仁親王とともに出席している。⁽⁴³⁾

『中外商業日報』一九一九年四月五日付朝刊に掲載された談話「改善の根本義——自覚と気風の振興——」で忠篤は、養蚕は米農家が副業として取り組んでおり、農家の「気風如何」が「直に国力の消長」につながるとして、「此副業の由つて来れる真意義を自覚し、或は進んで養蚕が如何に国家の利益となるべきかに付き国家的観念を以て考慮研究」する必要性を説き、その上で「経済組合」などを組織して「共同的進歩改善」を勧めるべきことなどを主張している。⁽⁴⁴⁾

同紙一九二二年三月二六日付朝刊にも忠篤は「蚕糸業振興策」との談話を寄せ、第一次世界大戦の影響を受けて「蚕糸業の経営は次第に困難」になっているとして、第一に「養蚕製糸、蚕種、貿易の各営業者が相互連絡即ち経済的に意思の疎通を徹底」すること、第二に「品質品位を改善」して「海外販路の拡張を図る」必要性を説き、ワシントン会議を経て「人類共存の理想として文化の進歩、生活の向上」が求められるなかで蚕糸への需要は高まっており、「深刻なる世界経済戦」に勝ち抜かなければならないと述べた。⁽⁴⁵⁾

忠篤は一九二五年六月に『日本公論』に発表した「蚕糸業発展に努力せよ」でも、輸出産業としての生糸業への関心と評価について、次のように述べている。

日本の如き国土狭く、天然資源の豊かならざる国柄に於ては、国内産業のみに依頼してはその繁栄は望み難いのである。……貿易の逆潮に抗し、巍然として頭角を抽んで、居るものに蚕糸類がある、これは連年輸出増加に次ぐ増加を以てし、昨年度の如きは輸出額実に七億五百万円を突破して、本邦の輸出品總額の約四割に垂んとする盛んな有様である。……産業立国の政策としては、我蚕糸の如き有望なる生産業の發

達を更に／＼助長すべきであることはいふまでもない。⁽⁴⁶⁾

国土が狭く天然資源に乏しい日本では、貿易を盛んにし、特に蚕糸業を輸出産業として発展させるべきだというわけである。

世界恐慌の煽りを受けた一九三二年一月には、『中央蚕糸報』に「蚕糸業と統制」と題する論考を寄せ、忠篤は次のように説いている。

世界経済界の恐慌が一段の深刻味を加ふると共に、斯業の不振は愈々甚しく、養蚕、蚕種、製蚕、貿易の各業その孰れも問はず、益々経営難を招来せしめ、業者の悲痛なる状況は衷心より深憂に堪えざる所である。……各業者が互に分立対峙するより更に一步を進め連絡協調の実を挙げ、蚕糸業全体を打て一団となし、脈路一貫終始相提携し、以て共存共栄の実を挙ぐるに務めねばならないのである。時恰も全蚕糸業者永年の輿望によつて制定せられたる蚕糸業組合法施行は已に前年七月より実施に入り……その統制の徹底こそ全蚕糸業の合理化を完成せしむる唯一無二の方途である。⁽⁴⁷⁾

恐慌による経営不振への対応策として、蚕糸業界の連絡・協調・団結と蚕糸業組合法による統制、経営合理化に期待したことがわかる。

前年三月一九日の貴族院輸出生糸検査法中改正法律案特別委員会で忠篤は、「実ハ我国ノ蚕糸業ト云フモノハ、非常ニ疲弊シテ居リ、此頃ハマア極度ニ達シテ居ル」として、その最大の原因を「当業者ガ今マデノ通り

統制力モナク、各々勝手ノ行動ヲシテ居ル」点に求め、「連絡統制」のもとに「協調」し、「組合法」によって事業の改善、発達、刷新を図ることが「刻下ノ急務」だと述べていた。⁽⁴⁸⁾これが長期かつ多岐にわたって活動した貴族院議員・牧野忠篤の帝国議会における最後の発言であったことは、忠篤がいかにこの問題に強い関心を寄せていたかを裏書きしている。なお、蚕糸業組合法によって道府県ごとに養蚕蚕種、組合製糸、製糸、問屋、輸出の各業組合が組織され、これを統制するために日本中央蚕糸会が結成されると、忠篤が会長に就いた。⁽⁴⁹⁾

一九三三年四月二四日付の『中外商業日報』朝刊には「人絹は好敵手——徒に恐怖する勿れ——」との忠篤の談話が掲載され、現在は「非常時」だが「蚕糸業界もまた非常時」であり、「人絹」の発達によって生糸が織物業界から駆逐されるという懸念があるが、「徒らに悲観し、生命の糧とする生業を見棄てようとまで考へるのは少し早まり過ぎた行き方」だと述べ、「人絹」に敗北しないために「生糸の真価を消費者に認識」させる必要がある、そのために生糸が「相当廉価」であること、「価格が安定」していることを周知させるべきだと説いた。⁽⁵⁰⁾「人絹」とは、人工的に作られたレーヨン長繊維のことである。忠篤は、戦争や恐慌、人絹といった様々な危機の到来に対して、具体的な処方箋を示して製糸業界を守らなければならない社会的地位と思想的立場にあった。

忠篤が期待したもう一つの産業である農業については、一九一〇年に、農業の改良発達や農家生活の改善向上、農業社会施設の充実、農民の知識啓発、政府への建議・答申、農業統制・紛争仲裁などを目的として、全国農家の自治団体である帝国農会が設立され、忠篤は晩年の一九三二年に会長に就任している。町田忠治・農林大臣の懇請によるもので、同会は米価下落や農業不況、世界恐慌などへの対応のため、米価の最低価格公

定、農家の負担軽減、農家の負債整理助成、満洲移民計画の樹立などを政府に建議したが、忠篤はその活動を統督し、米穀委員会委員、農林省米穀部顧問、米穀統制調査委員会委員などを歴任して、米穀法及米穀需給調節特別会計法改正、米穀統制法公布などの実現に寄与している。⁽⁵¹⁾

会長就任時に周囲から寄せられた評判の一端として、一九三一年二月の『文化農報』に掲載された記事「牧野忠篤子爵の帝国農会々長就任に就て」を紹介しておこう。同記事は忠篤について、次のように評している。

子爵は特に蚕糸業には関係が深い。大正十二年の大震災では横浜に於て六千万円の生糸が焼けた時に故渋沢子や志村氏等と共にうまく始末をつけた。近時の糸値暴落に際しても低利資金の融通等に努力した。大正五年には清浦伯の後をうけて大日本蚕糸会々頭に就任、其後蚕糸中央会の会頭にもなつたかやうな人を農会長に迎へた事は結構である。未曾有の農業恐慌だ。今年の米作は昨年と反対に大減収を報ぜられる。子の手腕に待望することが多い。⁽⁵²⁾

忠篤が蚕糸業と関係が深かった点については先述したが、関東大震災で横浜の生糸が焼けた際には渋沢栄一らと対応に奔走し、蚕糸業界で実績を挙げた忠篤を「未曾有の農業恐慌」の今日、会長に迎えることを歓迎し、その手腕に期待している。昭和恐慌と凶作によって、農業界もまた危機に陥っていた。

忠篤は恐慌による農村の疲弊と農家救済に強い関心を寄せた。一九三三年三月に『帝国農会報』に寄せた「農村経済更生計画について」では、次のように論じている。

昭和六年末頃から昨年上半年までは、農村の空気が非常に陰悪となり、農村救済運動が、不穏な思想的運動と混同されさうに觀られ、眞に憂慮に堪へざるやうに感じられた。……農村の経済的打撃は、淵源遠く且つ深刻であるから、経済更生は容易な事情ではない、同時に実行の伴はないやうな計画を樹立してみた所で何等の価値はない。従つて当初に於ける計画は最も慎重に考究し、小農の本質に即した計画を樹てねばならぬ。⁽⁵³⁾

農村救済運動が「不穏な思想的運動」と捉えられることを懸念しつつ、実効性の高い経済更生政策を慎重に、かつ「小農の本質」に即して計画しなければならないという。忠篤は政策の推進とともに、農家自身による自力更生に期待を寄せており、「政府に救済策の断行を力強く要望すると共に、他方情気切つて居る農村民の意気を振い立たせるために自主独往の精神を鼓吹せねばならぬ」と強調している。⁽⁵⁴⁾

翌年一月の同誌に寄せた「昭和九年度を迎ふるに当りて」でも忠篤は、こう述べた。

農村の国家的任務に対する担当部面は、国家が非常時であるが故に著しく拡大した。是れ田舎問題として片隅に追ひやられて来た農村問題が、今日俄に国家問題となりしとて登場して来た所以である。……吾々は昭和九年度以降の農会の進路としては、總て農村問題に関する限り先づ大本を農会が計画立案し之を提唱して政府なり議會なりに反響せしめ其実現を期するといふ事にし度い。……安心なり度き難き米穀問題、其他農産物価格維持政策の問題、並に販売統制の問題、更に農家の本来の使命とする指導的奨励事情の徹底化に就いて渾身の努力を傾注し、之れが解決に当らむとする者である。⁽⁵⁵⁾

「非常時」における食糧確保の国家的重要性が増す中、農産物価格や販売統制など、農家の抱える問題について政府や議会に政策提言し、これを実現することを説いたわけである。

忠篤自身、積極的な政策提言を試みており、一九三二年六月二日には日本中央蚕糸会会長として、全国養蚕業組合連合会会長の藤村義朗、全国製糸業組合連合会会長の今井五介とともに斎藤実首相と面会し、現内閣が「農村経済の振興」を標榜しながら、何ら具体的な対策を講じていないとして、「滞貨糸」を政府が買い上げるよう要望し、斎藤も重大問題であるため農林当局と協議したいと応じていた。⁽⁵⁶⁾

こうした全国規模の実業団体を統轄する傍ら、忠篤は長岡の実業界とも密接な関わりを持った。忠篤は宝田石油監査役や長岡鉄道相談役などを務めているが、長岡商業会議所会頭の鷲尾徳之助は、「子爵は、各種の会社から重役に就任を懇請されても殆んど悉く受諾されなかつたが、郷土復興の資源たる石油事業の会社には重役の任に就き、名義ばかりの重役でなく、実際の会社興隆上に努力せられた事は衆知の事実である。之は全く子爵の郷土愛精神の発露に外ならぬが、又子爵の卓越せる識見からでもあつた」と証言している。⁽⁵⁷⁾やはり、長岡の事業は忠篤にとって郷里愛に裏付けられた、特別な意味を有するものであった。

長岡鉄道会社専務の小秋元三八吉も、「長岡鉄道会社は、大正三年七月の創立で、其当時から子爵は相談役で、重大問題起る毎に子爵を煩はし、難局打開の道を拓いて貰つた。特に長鉄国有問題が議会に提案さる、や、懇切至らざるなき援助を得た事は、会社としては永久に忘るべからざる恩恵を感謝して居る」として、忠篤が同社相談役として国有鉄道化にあたつて尽力したことに感謝し、その人柄についても、「子爵は、更に気取らぬザツクバランスの平民的人物で、長岡に於ける要職の者が一の社交団体を設け、漫然牛肉会と名けて会食した、子爵も其の仲間に入り牛鍋をつ、き合ひ、気持よく興ぜられた」と証言している。⁽⁵⁸⁾「平民的」な特徴は

思想面だけでなく、日常の人間関係にも及んでいたようである。

忠篤は一九三一年九月に『公政』に寄せた「長岡市の産業界に希望」において、次のように論じている。

今や故郷人士の多年熱烈に渴望せる鉄路上越線の開通によりて中央との距離を著しく短縮し、文物の進展に多大の恵沢を受けるに至つたに就ては、之を好調の転機とし、発奮砥礪、科学を基調とした此地に適應せる産業を振興し、以て国利民福を図る事に精進せられたい。予が『故郷の産業界へ望む』処のものは、即ち「長岡市民及周囲の人々は上越線全通の喜びを永遠に忘却する事なく、此好条件に眠るべからず」の一言でありて、奮闘の歴史を飾りたる先人の血を受けた人々は、必ずやより以上奮闘活躍の業績を挙ぐるものである事を信じたい。⁽⁵⁹⁾

上越線の開通によって首都圏との距離が短縮され、その文物の発展の恩恵を受けられることになったのを契機に、「科学」を基調とした産業を發展させ、「国利民福」を図ることを説き、長岡市民はこの好機を逃してはならないと強調している。⁽⁶⁰⁾そこには、戊辰戦争での悲惨な経験と厳しい戦後処置から失地回復を目指してきた「奮闘の歴史を飾りたる先人の血」を無駄にしてはならない、という強い意志が存在していた。

五 結びに代えて

最後に、長岡で牧野家および忠篤が関与した教育関係事業について触れた上で、本稿についての総括を試み

たい。

一八七二年一月に、旧長岡藩の子弟が社会的に活躍するためには洋学校を設立するほかないと考えた柏崎県大参事の三島を中心として長岡洋学校が設立され、慶應義塾から教師として藤野善蔵を招聘した。⁽⁶¹⁾すでに触れたように、藤野を含めて草創期の義塾には多数の長岡藩出身者が入学しており、義塾が分塾として借用していた広度院に限っても、一八六九年に一〇名、一八七〇年には七名が収容されていた。⁽⁶²⁾

長岡洋学校は一八七三年に新潟学校第一分校となり、以後、同校は長岡仮学校、私立長岡学校、古志郡町村立長岡尋常中学校、古志郡立長岡尋常中学校、新潟県古志郡立長岡中学校、新潟県立長岡中学校と変遷し、現在の新潟県立長岡高等学校に至っている。⁽⁶³⁾

一八七五年、貧窮な士族子弟の大学入学資金援助のため、小林雄七郎が中心となって「長岡社」が発足した。⁽⁶⁴⁾進学希望者に学資金を貸与して学問を奨励する団体で、社員の寄付によって運営されたという。一八七六年に第一回の貸費生三名が選出され、一九二四年までに八四名が選ばれている。⁽⁶⁵⁾

長岡学校に学んで東京帝国大学法学部教授となった政治学者の小野塚喜平次は、長岡社五〇年式典での講演で、次の五〇年は世界各国で政治的・社会的に「民衆的趨勢」が増進し、「デモクラシー」の発達は「賢良なる有識者」の進歩に委ねられるため、日本社会で「光彩を放つべき一大事業」は「育英事業」だと述べている。その上で小野塚は、「現代の長岡社員が、此永遠的生命ある愉快ある事業に努力する事は、単に先輩の素志を継承して之を貫徹する所以なるのみならず、又次の時代の長岡人、新日本人、及新世界人類に対する吾人の責務を果たす所以ならん」と述べ、同社の公益性を強調した。⁽⁶⁶⁾

忠篤は同社に経済的な支援を行っている。生涯を通して同社と関わり続けた長岡出身の法学者・渡辺廉吉は⁽⁶⁷⁾

同社での講演で、「今般我旧君主牧野忠篤公ハ本社ノ目的ヲ賛シ自ラ其資ヲ省シテ以テ大ニ補翼セラル、所アラントス、又願クバ社員諸君モ從來ノ愛顧ヲ継キ益々君公ノ篤志ニ背カサラン事ヲ」と語っており、忠篤の「篤志」に背かないよう論していた。⁽⁶⁸⁾ 実際、「牧野家資料」には、一九二六年二月二十九日付で忠篤が長岡社に一〇〇円を寄附した際の領収書が含まれており、「子爵牧野忠篤伝」も、「牧野忠篤子は、この長岡社創立以来、若干の資金を醸出したのみでなく、之が理事長の任に在ること十数年、社運の進展に努力し、多くの学生をして感奮興起せしめ、其の功績太だ顕著である」と評している。⁽⁷⁰⁾

長岡社の学資金によって、橋本圭三郎（日本石油社長）や西郷吉弥（日本赤十字病院長）、山本五十六（連合艦隊司令長官）⁽⁷¹⁾といった人材が輩出された。太平洋戦争下で一時活動を中断したものの、一九五六年に東京都武蔵野に大学寮を建設して現在に至っており、三〇〇名余りを世に送り出している。寮は一九九九年（平成十一年）に大改修され、二〇二三年にリフォームされて、学習環境が整えられた。⁽⁷²⁾

このほか、一九〇二年には旧長岡藩子女の育英事業のために「長岡樹人団」が発足し、忠毅名義の土地二町歩余を資本として学資を援助し、学舎を設けてその維持金を蓄積している。同年二月に忠毅が内務大臣の内海忠勝に提出した設立申請書は、「我旧長岡藩ハ曩ニ戊辰桑滄ノ変ヲ経間モナク廃藩ノ制ニ接シ糊口猶艱難ノ際ニ於テ恢復ノ計ハ人ヲ立ルヨリ善キハナシ」として、藩主以下士族が出し合つて教育にあててきた経緯を述べ、長岡樹人団を設立して「旧長岡藩士族ノ子女ノ為メ教育費補助ノ途」を設けたいと申し出ている。⁽⁷³⁾ 帝国大学から小学校まで、学校の種類や成績の優劣、男女を問わず、学校を卒業させる支援を行った。⁽⁷⁴⁾

長岡との接点という意味では、一九一七年に牧野忠成が長岡藩主として長岡を開府してから三〇〇年を記念した祭典が開催されたが、「長岡市民は戊辰戦争後の焦土のなかから立ち上がり、商工業都市としての発展を

遂げ、旧藩主牧野氏への感謝の気持ちが強かった」とされ、忠篤が総裁に就任、市長の河島が会長を務め、新潟県市連合物産共進会、衛生品展覧会、遺物展覧会、武術大会などの記念協賛事業が開催された。⁽⁷⁵⁾ 忠篤は東京でも長岡出身者の中核として活動し、一八八四年八月には雪堂（第一二代当主・牧野忠恭）の七回忌などを三田の済海寺で催し、⁽⁷⁶⁾ 一八八九年三月には三島らとともに両国の中村楼で「長岡人親睦会」を開いている。⁽⁷⁷⁾

以上のように、忠篤は慶應義塾と長岡との歴史的関係を踏まえて、三島億二郎、藤野善蔵、榎哲といった人々を介して義塾に入り、「士魂商才」「平民的自由主義」の教育を受けて、実業への関心と平民的態度を身につけた。卒業後も義塾出身の渋谷善作などの人脈を縁に石油から養蚕、農業へと実業界、また長岡政界に参画し、その手腕を発揮している。

こうした忠篤の活動の背後には、牧野子爵家当主、大名華族としての郷土愛と責任感があった。「近代」的思想・資質と「近世」的権威・家柄を兼ね備えた政治家・実業家としての忠篤が、「近世」的権威・家柄を求められる「殿様」でありながら、あくまで「近代」的思想・資質（自由・実業）を提供する「平民」として振る舞った点が、他の政治家や実業家に比した際の特徴としてあげられよう。それは福沢諭吉や慶應義塾の教育の成果であると同時に、伝統的士風が崩れ、「近世」的権威・家柄だけでは政治・実業・教育を推進できないことを、忠篤自身が自覚した結果であったとも考えられる。

忠篤は一九二九年当時、新潟三田会の幹事および長岡三田会の世話人の職にはなく、⁽⁷⁸⁾ 『慶應義塾学報』および『三田評論』によると、一九〇八年八月三日と一九一八年八月一日に新潟市で新潟三田会が開催されたことが確認できるものの、前者は参加者が不明であり、後者に忠篤は出席していない。⁽⁷⁹⁾ 小林や榎、渋谷といった人物以外の慶應義塾関係者とのネットワークは、忠篤の政治・実業活動にどのような影響を与えたのか。貴族

院での政治活動⁽⁸⁰⁾とあわせて、別稿における検討を期したい。

注

- (1) 「子爵牧野忠篤年譜」(坂本辰之助『子爵牧野忠篤伝』華堂子爵伝記刊行会、一九四〇年)、一〇八頁。同年譜では一八九〇年に学習院「高等科卒業」、一八九一年に慶應義塾「入学」、とあるが、「長岡日記要抄 自明治廿二年至全廿九年」(「牧野家資料」長岡市所蔵、受入番号一六)の一八八九年二月一日条に「忠篤様ヨリ学習院退校致候届」が出された旨が記され、慶應義塾福沢研究センター編『慶應義塾入社帳』第四卷、慶應義塾、一九八六年、一四八頁、によると慶應義塾入学が一八九〇年七月のため、それぞれ一八八九年退学、一八九〇年入学と訂正した。
- (2) 初期の慶應義塾における長岡藩出身者、および藤野善蔵については、丸山信「草創期の慶應義塾と長岡藩士」(『福沢手帖』第二二号、一九七九年九月)、二一〜二六頁、など参照。
- (3) 長岡市史編さん室編『三島億二郎日記(二)』——廃藩置県前後——(長岡市史双書三六)(長岡市、一九九七年)、二二頁。
- (4) 前掲『三島億二郎日記(二)』——廃藩置県前後——、三八頁。
- (5) 今泉省三『三島億二郎伝』(覚張書店、一九五七年)、一〇九〜一三八頁。
- (6) 「日誌 明治三年庚午歳 自閏十月同四辛未年歳至十二月」(「牧野家資料」長岡市所蔵、受入番号一一)。同資料には、忠毅に新井鎮吉と高野耕造が随行了たと記されているが、入社帳では、忠毅と同日(一八七〇年閏一〇月六日)に慶應義塾に入った長岡藩士族は、高野と中島武藤太の二名で、新井が入学した記録はない(慶應義塾福沢研究センター編『慶應義塾入社帳』第一卷、慶應義塾、一九八六年、三五九〜三六〇頁)。
- (7) 前掲『三島億二郎日記(二)』——廃藩置県前後——、一〇七頁。

(8) 小川原正道「初期慶應義塾における旧藩主——廢藩置県後の入社をめぐる——」(『福沢諭吉年鑑』第三〇号、二〇〇三年二月)、参照。

(9) 波多野伝三郎は長岡出身で、前名は前田友弥。当時は共立学舎で学んでいた。文部省出仕を経て、立憲改進黨結成時に入党、のち新潟県議會議員、衆議院議員、福井県知事などを歴任。忠篤とともに初代長岡市長候補となる。

(10) 小林雄七郎は長岡出身で、長岡藩大参事などを務めた小林虎三郎の実弟。慶應義塾を経て高知藩校・到道館で教鞭を執り、大蔵省に出仕、当時是在野で翻訳・政治活動などに従事していた。第一回衆議院議員選挙で当選(自由党)、翌年に死去している。

(11) 牧野忠篤「故波多野君」(渡邊幾治郎・樋口功編『波多野先生伝』悦心会、一九一三年)、二二六―二三九頁。忠篤が「三島翁建碑寄附金」として一〇〇円を寄附した領収書が、一九二六年二月二七日付で残されている(『牧野家資料』長岡市所蔵、受入番号二八四②)。

(12) 帝国大学法科大学卒業後、司法省に入り、大蔵省に転じて大蔵次官に就任、その後、宝田石油会社社長、日本石油社長。牧野はその財政・経営手腕を高く評価している(牧野忠篤「日石新社長橋本圭三郎君」『石油時報』第五六七号、一九二六年四月、二二―二三頁)。

(13) 前掲『子爵牧野忠篤伝』、四頁。

(14) 一八九〇年、慶應義塾別科卒業(三田商業研究会編『慶應義塾出身名流列伝』実業之世界社、一九〇九年、六三〇頁)。横哲は一八八三年に旧制長岡中学入学、幼名は寅次郎で、台湾塩水港精糖会社重役などを歴任した。

(15) 前掲『子爵牧野忠篤伝』、四―五頁。

(16) 慶應義塾編『福沢諭吉全集』第一三卷(岩波書店、一九七〇年)、一六六―一六八頁。

(17) 小川原正道『福沢諭吉の政治思想』(慶應義塾大学出版会、二〇二二年)、第五章・第六章、参照。

(18) 前掲『慶應義塾入社帳』第四卷、一四八頁。忠毅と違って忠篤に随行者はいなかったようで、忠篤と同時に慶應義

塾に入學した長岡の士族は見当たらない。

- (19) 前掲『慶應義塾入社帳』第一卷、五四〇頁。
- (20) 「牧野家資料」(牧野忠昌氏所蔵)、整理番号二八九―一一。
- (21) 「牧野家資料」(長岡市所蔵)、受入番号九一。
- (22) 越佐同盟会は、責任内閣制、選挙権拡大、政費節減、地方分権、条約改正などを目指して、一八八九年三月設立。詳しくは、小川原正道『明治の政治家と信仰——クリスチャン民権家の肖像』(吉川弘文館、二〇一三年)、九八―九九頁、参照。
- (23) 「牧野家資料」(牧野忠昌氏所蔵)、整理番号三〇八。
- (24) 『慶應義塾塾員名簿』(慶應義塾塾監局、一九二九年)、六一一頁、歴代知事編纂会編『日本の歴代市長』第二卷(歴代知事編纂会、一九八四年)、五四頁。前掲『長岡日記要抄 自明治廿二年至全廿九年』の一八九三年二月二四日条に、忠篤が「慶應義塾之試験」を受けたこと、翌年一月二二日条に「忠篤様慶応義塾御卒業ニ而……御祝賀会」が催されたこと、がそれぞれ記されているため、この間に卒業が決まった、あるいは卒業したものと思われる。
- (25) 高村眞夫「子爵の趣味生活」、前掲『子爵牧野忠篤伝』、八三―八五頁。
- (26) 慶應義塾編『慶應義塾百年史』中巻・前(慶應義塾、一九六〇年)、一〇六―一一三頁。
- (27) 波多野が牧野家に尽くしていたことは、すでに記した通りである。
- (28) 渡邊藤吉「子爵の思ひ出」、前掲『子爵牧野忠篤伝』、五五―五六頁。
- (29) 牧野忠篤「華族青年の親和競合ならんことを望む」(『華族青年会雑誌』第一卷一号、一八九六年五月)、一一―一四頁。
- (30) 「長岡市例規類纂」

(<https://www.city.nagaoka.niigata.jp/shisei/cat03/jyourei/reiki/>) (二〇一四年二月一九日アクセス)。

- (31) 長岡市編『長岡市史』資料編四・近代一（長岡市、一九九三年）、四八九～四九〇頁。
- (32) 前掲『長岡市史』資料編四・近代一、四八四～四八五頁。
- (33) 渋谷は一八八三年、慶應義塾卒。一九二九年当時の肩書きは、長岡銀行副頭取、北越製紙取締役、新潟信託取締役、長岡貯蓄銀行取締役、日本石油監査役、長岡鉄道監査役、長岡商工会議所会頭（前掲『慶應義塾塾員名簿』、八六八頁）。「牧野家資料」（牧野忠昌氏所蔵）に、一八九七年頃に作成された芳名録が残されており、そこに渋谷や河島良温の名がある（整理番号三六五）。この頃には、忠篤と交友があったのであろう。
- (34) 長岡市編『長岡市史』通史編・下巻（長岡市、一九九六年）、三五五頁。
- (35) 前掲『長岡市史』資料編四・近代一、四九〇頁。
- (36) 前掲『子爵牧野忠篤伝』、二〇頁。
- (37) ふるさと長岡のあゆみ編集委員会編『ふるさと 長岡のあゆみ』（長岡市役所、一九八六年）、二二二頁。
- (38) 前掲『長岡市史』通史編・下巻、三五五頁。建議の全文は、前掲『長岡市史』資料編四・近代一、四九〇～四九四頁、参照。
- (39) 前掲『子爵牧野忠篤伝』、二〇～二二頁。
- (40) 吉澤俊夫・大竹信雄監修『目で見る 長岡・柏崎の百年』（郷土出版社、一九九二年）、四二頁。
- (41) 「牧野家資料」（牧野忠昌氏所蔵）、整理番号一―一二九―三。
- (42) 「柏露酒造株式会社 歴史背景」
<https://www.kuramotokai.com/kikou/27/history>（二〇二四年二月一九日アクセス）。
- (43) 前掲『子爵牧野忠篤伝』、一二二～一四〇頁。
- (44) 「改善の根本義——自覚と気風の振興——」（『中外商業日報』一九一九年四月五日付朝刊）。
- (45) 「蚕糸業振興策」（『中外商業日報』一九二三年三月二六日付朝刊）。

- (46) 牧野忠篤「蚕糸業発展に努力せよ」(『日本公論』第一三卷六号、一九二五年六月)、一七―一八頁。
- (47) 牧野忠篤「蚕糸業と統制」(『中央蚕糸報』第一八六号、一九三二年一月)、一―二頁。
- (48) 「第五九回帝國議會貴族院輸出生糸検査法中改正法律案特別委員會議事速記録」第三号、八頁。
- (49) 「日本中央蚕糸会」(『ダイヤモンド』第二〇卷二二号、一九三三年四月一日)、九六頁。
- (50) 「人絹は好敵手——徒に恐怖する勿れ——」(『中外商業日報』一九三三年四月二四日付朝刊)。
- (51) 前掲『子爵牧野忠篤伝』、一五〇―一五二頁。
- (52) 一記者「牧野忠篤子爵の帝國農会々長就任に就て」(『文化農報』第二二二号、一九三二年二月)、三三五頁。
- (53) 牧野忠篤「農村経済更生計画について」(『帝國農会報』第二三卷三三号、一九三三年三月)、二頁。
- (54) 牧野忠篤「天は自ら助くる者を助く(眞の農村更生は結局自力更生にあり)」(『農業世界』第二七卷一四号、一九三二年一月)、二二―二九頁。
- (55) 牧野忠篤「昭和九年度を迎ふるに当りて」(『帝國農会報』第二四卷一号、一九三四年一月)、一―三頁。
- (56) 『読売新聞』一九三二年六月三日付朝刊。
- (57) 鷺尾徳之助「郷土愛に燃えた人」、前掲『子爵牧野忠篤伝』、四五―四六頁。
- (58) 小秋元三八吉「記憶すべき長岡の恩人」、前掲『子爵牧野忠篤伝』、四七―四八頁。
- (59) 牧野忠篤「長岡市の産業界に希望」(『公政』第一四〇号、一九三二年九月)、一〇頁。
- (60) 忠篤は他の鉄道事業にも関与しており、例えば一九二八年三月一日に「東京大阪間高速度電気鉄道新設」のための日本電気鉄道発起人会で創立委員・理事の一人に選出され、東海道線の「複々線」の新設に取り組んでいくことになった(『大阪毎日新聞』一九二八年三月二日付朝刊)。鉄道省はこの計画に消極的であったため、財界の有力者に加えて牧野ら加わったことで、創立委員は「相当実行力あるもの」と評されていたが、同省は依然として「慎重に審議」する姿勢で、形勢は予断を許さないと報じられている(『東京朝日新聞』一九二八年三月二四日付朝刊)。この計

画は結果として挫折するが、戦後の新幹線建設へと接続する発想であったと言われている。

- (61) 前掲『長岡市史』通史編・下巻、四八～五二頁。長岡洋学校の設立、経営、慶應義塾との関係などについては、新潟県立長岡高等学校創立百周年記念事業実行委員会編『長岡高等学校百年史』（新潟県立長岡高等学校創立百周年記念事業実行委員会、一九七一年）、など参照。

- (62) 慶應義塾編『慶應義塾百年史』上巻（慶應義塾、一九五八年）、三〇八～三二五頁。

- (63) 長岡高等学校ホームページ

(<http://www.nagaoka-h.nein.ed.jp>)（二〇二四年二月二五日アクセス）。

- (64) 前掲『長岡市史』通史編・下巻、一七六頁。

- (65) 前掲『ふるさと 長岡のあゆみ』、二〇六頁。

- (66) 小野塚喜平次「長岡社五十年式典の講演」（『互尊』第六九号、一九六四年一月）、八～九頁。

- (67) 前掲『長岡市史』通史編・下巻、一七七頁。

- (68) 「渡辺康吉の長岡社沿革講演」（前掲『長岡市史』資料編四・近代一）、三三三頁。

- (69) 「牧野家資料」（長岡市所蔵、受入番号二八四②）。忠篤没後の一九三五年五月一日付で、五〇〇円の寄附に対する妻・鉦子宛の礼状も送られている（同前、受入番号二八四①）。

- (70) 前掲『子爵牧野忠篤伝』、一五五～一五六頁。

- (71) 高野五十六が旧長岡藩家老・山本家を再興するにあたって、忠篤が尽力したという（剣持利夫「牧野忠篤」長岡市編『ふるさと長岡の人びと』（長岡市、一九九八年、七七頁）。

- (72) 公益財団法人長岡社ホームページ

(<http://www.ncb9.ne.jp/nagaokaryo/>)（二〇二四年二月一九日アクセス）。

- (73) 前掲『長岡市史』資料編四・近代一、三三三～三三四頁。

(74) 結城伴造『長岡の教育百年』（野島出版、一九六九年）、二〇二～二〇三頁、前掲『長岡市史』通史編・下巻、一七九頁。一九〇九年には帝国大学一名、大学専門部・専門学校五名、師範学校一六名、中学校八名、私立専門学校五名、小学校四四名に学資を補助していたが、一九三二年には帝国大学二一名、高等学校一〇名、大学専門部・専門学校二二名、通信官吏養成所一名、高等師範学校一名、師範学校二三名、中学校二名、甲種実業学校二一名、高等学校五名、私立大学七名、私立専門学校一〇名、その他公私立中等学校一五名、小学校六八名、大学院・大学研究生二名と、学資の補助対象者数が約五倍に増加している（前掲『長岡市史』通史編・下巻、一七九頁）。

(75) 前掲『ふるさと 長岡のあゆみ』、二二四頁。

(76) 『読売新聞』一八八四年八月二八日付朝刊。

(77) 『読売新聞』一八八九年三月一四日付朝刊。

(78) 前掲『慶應義塾塾員名簿』、四頁。

(79) 「塾報」（『慶應義塾学報』第一三三号、一九〇八年八月）、九〇頁、「塾報」（『三田評論』第二五四号、一九一八年九月）、七五頁。

(80) 貴族院の最大会派・研究会の幹部だった忠篤にとつて長岡は貴族院議員活動の拠点のひとつであり、一九二四年八月には青木信光、水野直ら研究会幹部とともに長岡の温泉に滞在している（『読売新聞』一九二四年八月二五日付朝刊）。

〔追記〕 本稿執筆にあたり、現・牧野家当主の牧野忠昌氏、前・長岡市立科学博物館の広井造氏に、特別な便宜をはかっていただいた。記して感謝申し上げたい。なお本稿は、鹿島学術振興財団研究助成「近代日本における国土・地域開発と華士族——旧臣会を中心に」（研究代表者・小川原正道）、慶應義塾学事振興資金「近代日本における大名華族の政治・実業活動——旧長岡藩主家当主・牧野忠篤を中心に」（研究代表者・小川原正道）の研究成果である。